

山と博物館

第52巻 第1号 2007年1月25日

市立大町山岳博物館

市立大町山岳博物館 企画展 特集号

「北アルプス ^{やまうど}山人たちの系譜 ^{けいふ} —嘉門次、品右衛門、喜作 登場の背景—」

会期：平成19年1月27日(土)～3月25日(日)



開催にあたって

市立大町山岳博物館

このたび、当館の平成十八年度企画展として、北アルプスの「山人」をテーマにした企画展を開催する運びとなりました。

大正時代に入るまでは十分な地図や山の案内書はなく、北アルプスにおける登山といえば夏山中心で、ルートを探しながらの探検的な登山が主でした。そのため、当時の登山には山を案内する者の同行が不可欠でした。このころ、登山者を案内したり登山の助言をしたりしたのは、山の地理に精通し、山中での暮らしに熟練した地元の猟師や樵など山人とよばれる山の幸を得て生活の糧としていた人たちが中心でした。

北アルプスの山人として広く知られるところでは、信州は安曇村島々（現長野県松本市安曇）の上條嘉門次、野口村大出（現長野県大町市平）の遠山品右衛門（本名里吉）、西穂高村牧（現長野県安曇野市穂高）の小林喜作の名が挙げられます。かれらは登山者に請われれば猟や山仕事の合間に山を案内し、登山の助言をしたりもしましたが、いずれも北アルプスを生活の場としていました。

かれら三人が持ち合わせていた狩猟の技術などは、生まれ育った山の集落に何世代にもわたって綿々と継承された山の知恵によるところが大きかったといえます。そうした山の知恵はかれらから次世代へも引き継がれ、後に誕生する近代登山における山案内人たちにも大きな影響をあたえたと考えられます。こうした流れをひも解いていくと、そこには「系譜」と呼べるような一連のつながりが表れてくるのではないだろうか。

本展は「第一部 山人の源流」「第二部 嘉門次、品右衛門、喜作の登場」「第三部 系譜をたどる」の三部から展示を構成しています。ここでは、嘉門次、品右衛門、喜作を中心に、北アルプスの長野県側を拠点に暮らした山人たちに焦点をあて、かれらが使ったと伝えられる道具などの関係資料を展示して紹介します。これにより、山人たちの山での暮らしを推測するとともに、山人としての嘉門次、品右衛門、喜作の実像に迫り、かれらがその時代に登場することになった背景について探ります。そして、かれら三人が持ち合わせていた山の知恵を継承した次世代の猟師や山案内人たちの系譜をたどります。

本展の開催にあたり、貴重な資料をご出品いただきました所蔵者の皆様ならびにご協力いただきました関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

企画展「北アルプス

山人たちの系譜

—嘉門次、品右衛門、喜作 登場の背景—

市立大町山岳博物館

第一部 山人の源流

山人とは、山間部や山麓に住んでいた地元の猟師や杣樵など、山の幸を得て生活の糧としていた人びとのことをいいます。

かれらは里での農耕を中心とする生活ではなく、奥山へ分け入っての狩猟・漁労・採集をおもに行ないながら暮らしました。こうした山人が生み出された源には、かれらが生活

した山の集落がもっていた地理的な要因や歴史の流れがありました。

一、山の暮らし

かつて、北アルプス山麓の山村では、クマ、カモシカ、サル、キツネ、タヌキ、ウサギ、テンなどからライチョウにいたるまで、里山から高山に生息するさまざまな鳥獣をとらえ、食用にしたり毛皮などを売ったりしました。

また、渓流を代表する魚であるイワナを釣り、収入を得ていた人々もいました。このほか、高山で生育する植物や産出する岩石・鉱物など、山岳のあらゆる自然資源をとり、生活の糧としました。

二、山の集落

北アルプス東面の山際沿いに、距離をおいて位置する島々（長野県松本市安曇）、大出（長野県大町市平）、牧（長野県安曇野市穂高）という信州の三つの集落。

これらの集落は、それぞれ各山域への入山口にもつとも近い場所に位置し、少なくとも大正期までは北アルプスに入山して山仕事を

する人々や登山者にとって重要な拠点でした。

(一) 安曇村島々（現松本市安曇島々）

江戸時代、松本藩は上高地をふくむ周辺の北アルプス東面一帯において藩有林の伐採事業を行い、「入四か村」（梓川上流域の溪谷沿いに点在するかつての大野田村、嶋々村、稲核村、大野川村の四村の総称）の村人たちが杣として森林伐採の仕事に従事しました。島々から島々谷川をさかのぼり、徳本峠を越えて明神付近に下る道は、上高地周辺で伐採を行なった杣たちが利用した重要な道筋でした。

(二) 野口村大出（現大町市平大出）

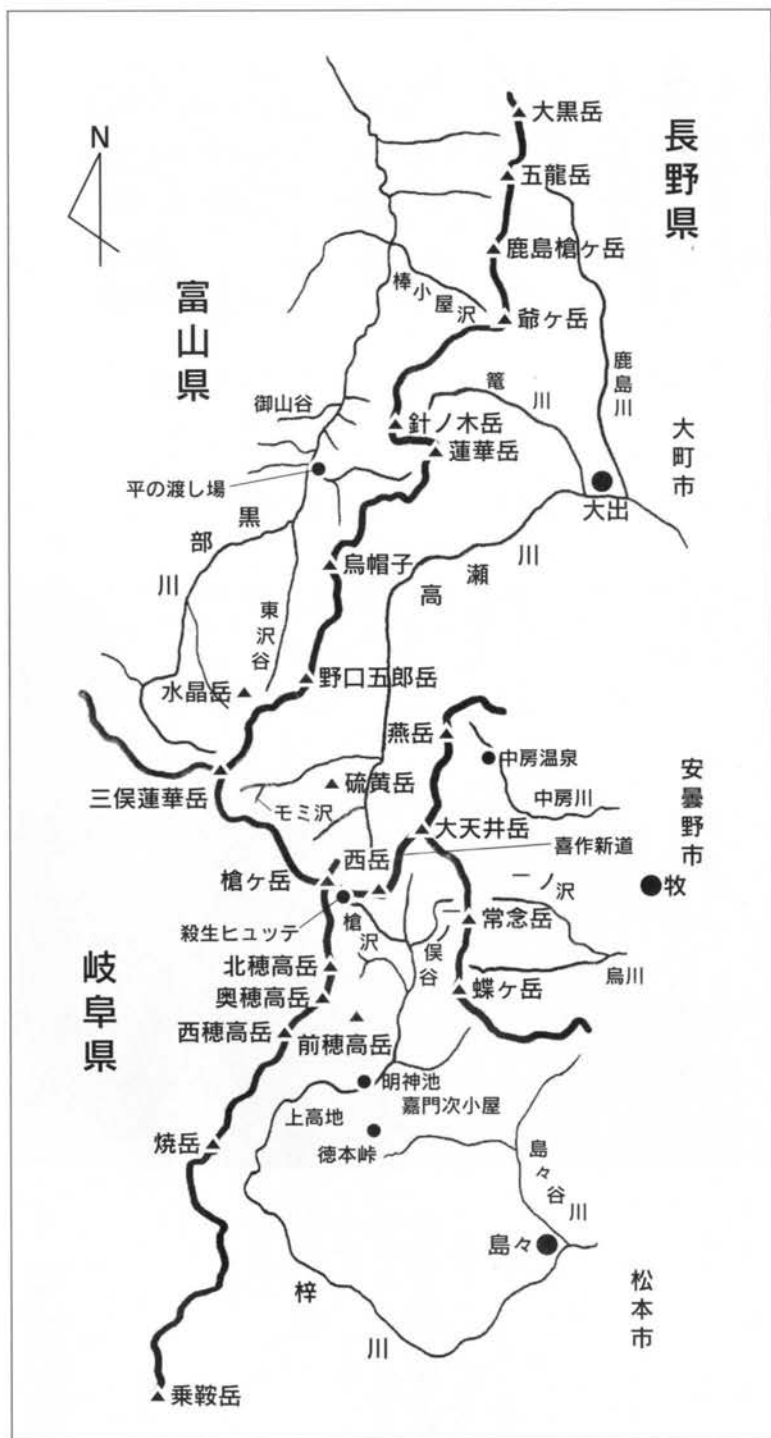
大出周辺では、箆川、高瀬川、鹿島川の三河川が合流しており、大出という地名は伏流水が大量に湧き出るところを意味するともいいます。明治期までは人家もまばらで、野口村西方に位置する同村の枝郷でした。

江戸時代、野口村は信濃・越中両国境に接し、松本・加賀両藩の領界に位置し、村の西奥には北アルプスという広大な山岳地帯をかかえる山の村でした。藩が領有する山の管理は同村に任されていた。

(三) 西穂高村牧（現安曇野市穂高牧）

牧は、鳥川扇状地の扇頂に位置し、北アルプス東面の山麓に沿った周辺地域からは縄文時代の遺跡が多数確認され、付近には数多くの古代の古墳も存在しています。この場所に古代、朝廷直轄の牧場である「猪鹿の牧」が成立したことが、その地名の由来といわれています。

さらに、牧山崎地区の西には、古代の終わりから中世の開山といわれる栗尾山満願寺も



北アルプス周辺関係概念図

あり、牧は穂高地域でもっとも古い歴史をもちます。

第二部 嘉門次、品右衛門、喜作の登場

北アルプスの山人のなかでも、ひとときわ際立った存在として語られる島々の上條嘉門次、大出の遠山品右衛門、牧の小林喜作。

三人は登山者に請われれば猟や釣りの合間に山を案内し、登山の助言をしました。それにより、明治期以降に展開されたいわゆる近代登山史に山案内人として登場することになります。あくまでもかれらの本業はクマ・カモシカ猟やイワナ釣りでした。

一、上條嘉門次(旧姓・有馬)

弘化四年(一八四七)生まれ。大正六年(一九一七)没。稲核村明ヶ平出身、後に島々で暮らす。「上高地の主」「穂高の仙人」「南のおやじ」などと称される島々の猟師・釣師。幼少のころから父・有馬又七につれられて徳本峠周辺へ猟に出かけたといわれています。安政五年(一八五八)夏、十歳のときに父に連れられて上高地へ入り、柚の見習いとして



「上條嘉門次」上高地にて
明治45年(1912)7月下旬 沢沢敬三撮影
(上條輝夫氏提供)

一説に慶応二年(一八六六)ころ(十四、十五歳ころ)から黒部溪谷に入るようになったといわれています。おそらく柚などの山仕事や猟のため、父・遠山新三郎(通称・長左衛門か?)に連れられてのことだったと思われます。そして、明治八年(一八七五)ころ(二十三、二十四歳ころ)に黒部川平の右岸側に仮小屋(平の小屋)を建て、以後、ここを拠点に夏はイワナ釣りを行いました。明治四十年ころまでには、平の小屋のほかにも黒部川上流の東沢出合と下流の御山谷出合にも仮小屋をもち、

過ごして以後、柚仕事のため上高地に季節的に滞在するようになり、元治元年(一八六四)夏、十六歳で松本藩の藩有林見廻役の助手になりました。そして、明治十三年(一八八〇)(三十二、三十三歳)、明神池畔に狩猟用の仮小屋(嘉門次小屋)を持ち、以後、ここを拠点に猟や釣りを行ないました。

一方、明治十八年夏、三十七歳のときに農商務省技師・坂市太郎の槍ヶ岳・鷲羽岳・薬師岳縦走を案内したのが記録に残る最初の登山案内です。それ以前にも明治十年にイギリス人冶金学者ウィリアム・ガウランドらを槍ヶ岳に案内したのとはともいわれます。記録にある限りでは、登山者を山に案内した回数、おもに晩年の十年間を中心に二十回弱です。

二、遠山品右衛門(本名・里吉)

嘉永四年(一八五一)生まれ。大正九年(一九二〇)没。野口村大出出身。「黒部の主」「山の親父」「仏心をもった山の主」と称される大出の猟師・釣師。

一説に慶応二年(一八六六)ころ(十四、十五歳ころ)から黒部溪谷に入るようになったといわれています。おそらく柚などの山仕事



「遠山品右衛門」平の小屋にて
明治44年(1911)8月29日撮影 (当館蔵)

山林局から盗伐の監視役を依頼されていたともいわれています。

一方、実際の登山案内は行なわなかったよう、明治四十四年(あるいは四十三年)十月、六十歳のとき、当時三十四歳の長男・作十郎とともに、大町にあった旅館・對山館の百瀬慎太郎(当時十八歳)を平の小屋まで連れて行った記録が唯一残るだけです。

三、小林喜作

明治八年(一八七五)生まれ。大正十二年



「小林喜作」
(小林貢氏提供)

(一九三三)没。西穂高村牧出身。「山の神」「アルプスの名物男」などと称された牧の猟師。

十代のころに、牧の猟師・藤原浜吉に頼んで飯炊きや持子(獲物の運搬役)として猟へ連れて行ってもらったり、烏川村あるいは三田村(現長野県安曇野市堀金)の猟師・猿田弥太郎や牧の猟師・藤原為一郎(通称・為右衛門)についてたりして猟を覚えたとも伝わります。

明治末期から、猟や山仕事の合間には登山者を山へ案内しました。

大正九年(一九二〇)秋、中房温泉経営者・百瀬猪三郎、百瀬彦一郎親子の協力のもと、長男・一男、牧や有明村現長野県安曇野市穂高)の住人二十名前後も携わり、大天井岳から西岳をへて東鎌尾根から槍ヶ岳へいたる登山道(喜作新道)の開削工事を一応完了させ、翌十年に本格的に完成させます。そして、同年秋、牧の大工・寺島文治らとともに、殺生小屋(現殺生ヒュッテ)を新道の終点付近にあたる槍ヶ岳直下に建設し、翌十一年六月に小屋を開業させました。しかし、翌十二年三月、出猟中に爺ヶ岳北西の棒小屋沢で、雪崩によって長男・一男とともに遭難死しました。

第三部 系譜をたどる

嘉門次、品右衛門、喜作の三人が、生まれ育った山の集落において継承し、身につけていた狩猟や山歩きの技術などの「山の知恵」は次世代へも引き継がれ、のちに誕生する近代登山における山案内人にも大きな影響をあたえたと考えられます。

ここでは、嘉門次、品右衛門、喜作を中心にして、北アルプスの信州側における山人と初期の山案内人の系譜をたどります。

一、島々周辺の山人

(一)上條一族

上條嘉代吉(嘉門次 長男)・・・明治四年(一八七二)生まれ。大正八年(一九一九)没。島々出身。

上條孫人(嘉代吉 三男、島々の山案内人)・・・明治四十三年(一九一〇)生まれ。昭和五十一年(一九七六)没。島々出身。

(二)嘉門次の弟子

大井庄吉(嘉門次に師事、数河出身で島々の獵師・釣師)・・・明治十二年(一八七九)生まれ。昭和十九年(一九四四)没。細江村数河(現岐阜県飛騨市)出身。

内野常次郎(嘉門次に師事、中尾の獵師・釣師)・・・明治十七年(一八八四)生まれ。昭和二十四年(一九四九)没。上宝村中尾(現岐阜県高山市上宝)出身。

二、大出・大町周辺の山人

(一)遠山一族

遠山作十郎(品右衛門 長男)・・・明治十年(一八七七)生まれ。大正六年(一九一七)没。大出出身。

遠山兵三郎(品右衛門 次男)・・・明治十三年(一八八〇)生まれ。昭和二十九年(一九五四)没。大出出身。

遠山富士弥(品右衛門 三男)・・・明治二十年(一八八七)生まれ。昭和四十一年(一九六六)没。大出出身。

(二)黒部の山賊

終戦直後の昭和二十年(一九四五)、北アルプス周辺では三俣蓮華岳方面に山賊がいて黒部溪谷一帯を荒しまわっているという噂話が

広まっていた。『黒部の山賊』と噂されたのは、当時無人となっていた三俣小屋を根城に、獵や釣りをして過ごしていた遠山富士弥を筆頭にする大町周辺の獵師たちでした。

遠山林平(大出の獵師・釣師)・・・明治三十四年(一九〇一)生まれ。昭和四十九年(一九七四)没。大出出身。

倉繁勝太郎(新潟出身で大町の獵師)・・・明治二十年(一八八七)生まれ。昭和二十八年(一九五三)没。新潟県出身。

鬼窪善一郎(広津の獵師)・・・大正三年(一九一四)生まれ。平成九年(一九九七)没。広津村梅尾(現長野県北安曇郡池田町広津)出身。

(三)黒部最後の職漁者

曾根原文平(富士弥と組む、大町の釣師)大正四年(一九一五)生まれ。平成十二年(二〇〇〇)没。大町八日町(現長野県大町市大町)出身。

三、牧・有明周辺の山人

(一)喜作の師匠

喜作は、十代はじめころから二十歳ころまで、牧周辺の獵師たちに頼んで獵へ連れていつてもらっていたといわれています。そうすることで喜作は一人前の獵師に成長していったものと思われま。

ここでは、幼いころの喜作を獵に連れていったことがあると伝わる、江戸末期から明治・大正期ころの牧周辺の獵師たちを紹介します。

(二)小林一族

小林一男(喜作 長男)・・・明治三十五年

(一九〇二)生まれ。大正十二年(一九二三)没。牧出身。

四、山案内人

北アルプス山麓の山村にすむ山人たちは、狩獵や山仕事の経験をかして明治期から登山者を山へ案内しました。そして、大正初期、近代登山が隆盛をみせはじめると、里で農耕を中心にくらす人のなかにも、夏場の現金収入源として登山案内を行なう人もあらわれます。こうした初期の山案内人の場合、山人と一緒に山を歩くことではじめて山を覚えることも少なかつたと思われま。

ここでは、大町周辺において、明治末期から昭和中期ころに活動したおもな初期の山案内人たちを紹介しま。

(以上、展示解説文より一部抜粋)
※本展にあわせ、展示内容を詳しく紹介した展示解説書(A四判・単色刷・46頁、税込価格二〇〇円)を販売しま。ご希望の方は当館までお問い合わせください。

企画展のご案内

「北アルプス山人たちの系譜」

一 嘉門次、品右衛門、喜作 登場の背景
■会期 平成十九年一月二十七日(土)・三月二十五日(日)

(会期中の月曜日、祝日の翌日は休館。ただし、月曜が祝日の場合は開館し、翌日休館)

■時間 午前九時～午後五時
(入場は午後四時三十分まで)

■場所 市立大町山岳博物館
特別展示室・ホール

■主催 市立大町山岳博物館
■後援 信濃毎日新聞社 朝日新聞松本支局 中日新聞社 読売新聞松本支局 毎日新聞松本支局

産経新聞社長野支局 大系タイムス株式会社 民友信州 市民タイムス FM長野 SBC信越放送 NBS長野放送(株) テレビ信州 長野朝日放送(株) アルプスケーブルビジョン(株) 大町市有線放送電話農協

■観覧料 通常入館料金大人四〇〇円、高校生三〇〇円、小・中学生二〇〇円
(常設展示と共通、三十名様以上の団体は各五〇円割引、そのほか各種割引あり)

関連催しのお知らせ

企画展開催にあわせ、会期中、記念講演会を開催しま。

山岳ジャーナリストの菊地俊朗氏を講師にお招きし、山人である嘉門次、品右衛門、喜作が日本における近代登山史に登場することになった背景について、当時の社会状況を含めて解説いただき、かれら三人の実像に迫りま。

なお、この講演会は山岳博物館友の会総会の記念講演会も兼ねておりま。

■会場 市立大町山岳博物館 講堂
■主催 市立大町山岳博物館

■参加費 無料
■申込み 不要

詳細などについては山岳博物館までお問い合わせください。

山と博物館 第52巻 第1号

発行 市立大町山岳博物館
〒388-0002 長野県大町市大町八〇五六一
市立大町山岳博物館
TEL 〇二六-1111-1111
FAX 〇二六-1111-1111
E-mail:sanpak@city.omachi.nagano.jp
URL:http://www.city.omachi.nagano.jp/sanpak/

印刷 奥村印刷
定価 一、五〇〇円送料含む(切手不可)
郵便振替口座番号 〇〇五四〇七 一三三九三